【毒もて語れ】

ノドカ（２８）…図書館司書
美保（２８）…ＯＬ
京子（２８）…主婦
桜（２６）…ノドカの隣人、妊婦
ノドカの母親

○地下道

蛍光灯の灯りで薄暗い地下道。
鉢植えに入った観葉植物を抱えている
ノドカ（２８）。
紫の手袋を嵌め、虚ろな目をしている。

○タイトル

○ノドカ宅・ベランダ・（昼）

植物で溢れたベランダ。
ビニールの手袋をしたノドカ、赤い実
を採る。

隣の部屋から布団を持った隣人の桜（２６）が出てくる。

桜「こんにちは」

ノドカ「こんにちは、お腹目立って来ましたね」

桜、お腹をさすり

桜「そうですか？　蹴ったりはまだしないんですけど」

ノドカ、ニコニコと笑っている。

○同・居間

ベランダの観葉植物を見ている美保（２８）。

テーブルの上にミルフィーユ鍋が置かれており、ノドカがカイワレ大根を入れている。

ノドカ「気をつけて、触るとかぶれたりするから」

美保、身を引き

美保「また増えたんじゃない？」

ノドカ「うん、唯一の趣味みたいなもんだし、そういえば京子は？」
美保「遅れるって、だから先に始めてていいんじゃない？　子供預けにいってんでしょ」
ノドカ「京子の子って見たことある？」
美保「うん、可愛い女の子だったよ」
ノドカ「そうなんだ」
美保「私も親にせかされちゃってさ。まだ結婚もしてないのに」
ノドカ「私もお母さんの法事の時に言われた」
美保「あるよね。親戚のそういうの。まぁ、それぐらいしか話題がないんだろうけどさ」

チャイムが鳴る。

ノドカ「来たんじゃない？」
美保、玄関に向かう。
ドアを開けると、顔に絆創膏を貼った京子が立っている。
驚く二人。

×　　×　　×

鍋を囲って座っている三人。

ノドカ、具をよそうが京子手を付けない。

京子「結婚した後から言葉だけじゃなくて暴力も酷くなってきてさ」

美保「でもそんな感じしなかったけど」

京子「あの人外面はいいから……でも子供が出来たら変わってくれるだろうって思ってたんだけど、そしたら知らない間に仕事も辞めてて」

美保「警察に」

京子「やめて！」

美保「でも」

京子「もう一度話し合ってみるから。うん、大丈夫、あの人も辛いんだし」

京子をじっと見ているノドカ。

○同・玄関

京子と美保がドアの外に立っている。

美保「今日はありがとう。ごめんね。変なこと」

ノドカ、ジップロックに入れた赤い実を渡す。

美保「何これ？」

ノドカ、何かを耳打ちする。

○図書館・（回想）

中学生のノドカ（１４）が植物図鑑を見ている。

○ノドカの家・廊下

ビニールの手袋をはめて、野草を持っているノドカ。

和室で泣いている母親。

ノドカに気づき

母親「お帰り、ごめんね。今、ご飯作るから」

母親に野草を渡す。

母親「？」

ノドカ、何かを耳打ちする。

○（戻って）ノドカ宅・ベランダ・（夕方）

ノドカが水やりをしている。

チャイムが鳴る。

中に入るノドカ。

○同・玄関

ドアを開けるとスーツを着た美保が立っている。

美保「ちょっといい？」

○同・居間

美保が立ったままノドカを睨み付けている。

ノドカ、ベランダの植物をバックに立っている。

ノドカ「どうしたの？　怖い顔して」

美保「京子が死んだ」

ノドカ「そう」

美保「驚かないんだね」

ノドカ「そんなことないよ」
美保「嘘、あの子に何渡したの？」
ノドカ、植物を指差し
ノドカ「あれ。トウアズキの実。東南アジアの花でね。とっても可愛い実がなるの。育てるの大変だったんだ」
美保「何でそんなの」
ノドカ『『飲ませれば楽になるよ』って言ったのに自分で飲んじゃったんだ。お母さんと一緒だ」
美保「？」
ノドカ「私ね、あの子のこと嫌いだったんだ。毎回、男にいいようにされた泣いてばっかりいて、私のお母さんみたいでさ」
美保「お母さんって中学の時に」
ノドカ、ニコニコと笑っている。

○地下道

観葉植物の鉢を抱え、社交ダンスの様にステップを踏むノドカ。

○ノドカ宅・ベランダ

観葉植物の剪定をしているノドカ。

隣人の桜がしゃがみこんで泣いている。

ノドカ、一輪の花を差し出す。

顔を上げる桜。

ニコニコと笑っているノドカ。

（完）